關西大學々報

報國團及び報國隊の再認識

學部報國團總務部長　教授　水谷揆一

本學に於て報國團が結成されてから、年月にして約二年間、學部學年としては實に三學年を經過せんとしつゝある。申すまでもなく、此報國團なるものは、所謂、學校新體制に則つて、舊學友會に代つて結成されたものであるが、然しそれは、名稱乃至形體上の變更でなくして、茲に、舊體制より新體制への轉換を意味し、報國團は、全然違つた觀念と使命のもとに其誕生を爲した筈であつた。然し永年の歷史と傳統に培はれた學友會時代の觀念は、簡單に、容易に變更さるべきでなかつた。尤も此事は、われ〳〵としても決して豫想して居なかつたわけのものではなく、寧ろ、われ〳〵は、それが文部當局の方針であつたか如何かは別として、兎に角、形を先きにして、精神をあとにする、所謂、佛造つて魂をあとから入れると云ふ方法については、色々と批評もし、又其徹底に相當の懸念も持つたのであつた。然し、この樣な建前で行くのも確かに一つの方法であり、先づ形を整へて然る後、徐々と其內容の充實を期すると云ふ方針も强ち惡いとも思はなかつた。

それは兎に角として、報國團については其理念と云ふか、魂と云ふか、指導精神たるべき新體制と云ふものが、稍々、漠然たる意義のものであつた事は否めない事實である。當時人々はよく學校新體制と云ふ言葉を使つたが、新體制とは何ぞやと云ふ質問に對しては明確なる答へは少なくとも端的には與へにくい狀態であつた。元來學校新體制具現と云つても當時に於ては學友會の改組が其大方を代表する樣な姿であつて、從來學校の生命と見られて來た教授上の事に付ては、具體的には、少なくとも、急速の改變を齎らすと云ふ樣な事はなかつた。それで、先づ舊學友會の改組、と云ふよりは其報國團への發展的解消が、此使命に添つてとりあげられたのであつた。尤も、所謂新體制に則つた報國團は之れによつて廣義に於ける教育の三分野たる、智、德、體、三育の內の、體育は云ふまでもなく德育をも之れと通じて其涵養をはかり、從來稍もすれば智育に偏し過ぎた學校教育、殊に、高等教育に於ける欠陷を補なひ、以て教育の完璧を期すると云ふのであつたと思ふ。從つて報國團に授けられた使命と責務は極めて重大なものであり少し大きく云へば、所謂新體制的學校教育の刷新と興隆との相當の部分が、其双肩にかけられたと云ふ譯であつた。

然し、さて蓋をあけて見ると、伸々どうして、所謂新體制と云ふものも、左樣に簡單に、右から左へ體得されるものでなく、名稱や、形體や、組織は容易に變つても、其精神に至つては實に舊態依然たる觀があつたのである。そこで、私達は、團員に此新體制的精神を注入するには、餘程指導的に出る必要があると思ひ、機會ある每に、舊學友會時代の學生自治の觀念を棄てゝ、指導に服せよ、然し創意的精神を忘るゝなと、稍々矛盾した樣な聲で呼びかけると同時に、教授諸兄に對しては大いに其指導的進出を期待したのであつた。處が、報國團は、其使命と責務が相當なものであるだけそれだけ、其歩みも亦急速に乘らず結局貸す時日を以てするの必要を痛感した。

然るに、斯くの如くして報國團が其歩みを續けて居る間に、國家の情勢は急テンポで其展開を示し、報國團亦他日の大成を期すると云ふ樣な立前は許されない事態となつたのは勿論である。即ち、其文化部門は暫らく措いて、鍛錬的方面に於ては、學徒は最早や、其心身の鍛錬を他日の爲めに爲すを許されず、それは國家今日の要請に應ずる爲めのものである事を明確に認識せしめられたのである。昨今、文部當局指導の一或は肝入りのもとに、各學校に於て實施されつゝある、鍛錬部又は體錬部の改組は、全く此要請に即應する爲めの一過程であると見るべきである。本學々部報國團に於ても

大正十一年六月十五日創刊
昭和十八年九月十日印刷
昭和十八年九月十五日發行
編輯兼發行人　神屋數民
大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷所　西大(22)谷口印刷所
大阪市大淀區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報部
會社登錄番號二〇六〇〇四

第二一二號要目

報國團及び報國隊の再認識……水谷揆一（一）
學校報國團と報國隊……中川庸太郎（三）
戰爭と科學技術……松原藤由（四）
學內報……（五）
校友欄……（五）

此改組は已に成案を得て、最後の審議決定を殘すのみとなり、何れ來るべき新學年よりこれが實施を見るに至る筈であるが、茲に又、私は、これが、再び形の上の改組に終始するものでなく、明確に其意義、精神を把握してのものでなければならぬと期して居る次第である。

更に又、時局の進展は、學校報國隊の結成を齎らした。申すまでもなく、報國隊は、報國團内部の一構成分子であるが國家今日の要請に應ずる爲め、一重要部門として、其出現が具體化されたのである。之れに依つて、學徒は、日頃の鍛錬を實行に移す機會を與へられたのである。勤勞作業は其本來の立場に於ては修業を目指したものであつたが、時局は學生勤勞を、其國民協力令に依ると否とに關はらず、單なる心身鍛錬の範圍に止まるを許さず、同時に、否寧ろ大なる割合に於て、勤勞の効果を其目標として要求するに至つたのである。學徒は勤勞に服するに際し、其最も多くの効果を擧げねばならぬ。而して又、軍關係の事に從ふ時に於ても、警防の充員たる時に於ても或は、一會社、一工場の作業を援助する場合に於ても、齊しくこれ、國家の要請に應じて、國家の爲めに、其勤勞に服するのであると云ふ觀念を明確に保持せねばならぬのである。

時局の前途計り知れぬものあるを思ふ時、重ねて學部報國團員諸君の團及隊に對する再認識を念願する次第である。

戰時下教育體系の一環としての
學校報國團と報國隊

專門部報國團總務部長・教授　中川庸太郎

資本主義的自由放任の盛んなる時代に於ては、學業は兎角國家、民族、道義から不斷に游離分散せんとする根强い傾向を有してゐたと見ることが出來る。學校經營者は教育的道義心を喪失し、經濟的にのみ學校經營の安固ならんことを念願し、教師は學徒教育の確信と情熱を失ひ其講義は抽象、羅列、無人格的で、學生の個々の行狀に對しても常に「我不關焉」の態度をとりつゝあつた。學生々徒も亦講義の内容については多く無關心で、ただ進級、卒業試驗の安易ならんことのみを念願したと見ることが出來る。節度禮儀を失ひ、怠惰放縱であらうとも、心底から忠告、改悛せしめるものも存在しなかつたとも見ることが出來る。運動選手は體錬の眞の意味を理解することなく、職業的スポーツ選手に墮し終つてゐた。言ふ迄もなく凡ての學園が、かくあつたといふのでは勿論ない。然し其大勢的傾向が資本主義的秩序の下に於ては、かくならざるを得ぬ必然性を有してゐたのである。

然し大體滿洲事變以降、自由主義思潮の凋落、國家主義擡頭、國際情勢の激變を反映するものとして、更には日支事變勃發後に於ては特に顯著に、學園生活にも劃期的な黎明が訪れて來たのである。從來の自由主義的、歐米的風潮に蟲食まれて、學業の自主的立場を忘却し、國體觀念を喪失し、教育が歸一するところを失ひつゝあつた職業的偏知教育を本然の姿に還元せんとする傾向は徐々に、遂には急速に擡頭しつゝあつたのである。此傾向は學園生活の幾多の方面に指摘することが出來る。經營者の立場に於て、教師の心構に於て、學科目の編成に於て、學友會の運營に於て、夫々認めることが出來る。此場合問題を純學業方面を除外するとして劃期的なる變化は昭和十五年秋より翌年春にかけ、全國的に行はれた大學、高等專門、中等學校の學友會の抜本的再編成で、其結果として誕生したのが學校報國團の結成である。

此學校報國團結成の主要目標の一つは爾來學業と、或は本來の教育精神と兎角分離し勝ちであつた學友會をして眞に報國の精神に徹せしめ、師弟同行、學業、國防、修錬、鍛錬、文化教養を以て一丸とする有機的一大教育體系を形成、運營せしめんとせるにある。學校は最早單なる狹義學術傳授の場所でなく、修錬、鍛錬の道場として、教室内外に於ける學業訓育、鍛錬を一體として、眞に現下國家の要望する有爲の人材を養成する修錬場たらしめんとする眞意圖を有してゐたのである。

尤も此報國團の結成は學友會の換骨奪胎的編成換ではあつたが、其實質的内容と活動範圍は未だ學友會的殘滓を多分に有してゐたと共に、愈々切迫する國内外情勢に即應するが如き機能的、流動的なる態勢を有してゐなかつたのである。かくて昭和十六年八月學校報國隊として眞に有事即應態勢たらめしるがために學長校長を統率者とする全校編隊の學校報國隊なるものが出來上つたのである。同時に是れを全國的に一大有機的體系たらしめるため文部省の學校報國隊本部より全國七地方に設置されたる學校報國隊支部を經て、各校報國隊へ上意下達する指揮系統が確立し、戰時下に於ける學校の使命達成の途が豁然として顯けるに至つた。かくて爾來兎角象牙の塔として、知育偏重の殿堂として時流の外に立たんとする大學教育にも、日々の修錬、體錬、勤勞奉仕を通じて、日本的精神と魂が吹き込まれ、教育と戰時下實生活との交流形式が確立したのである。

其後大東亞戰爭の勃發以降に於ける國内諸體制、諸構造の一大劃期的再編成と共に學園の諸體制も亦更に一段と適確有効に戰時即應の體系を完成しなければならなくなるは自明の事である。而も其後の戰局が愈々切迫し、如何なる激越なる言葉を以てしても尙十分强調表現し能はぬ眞に皇國の興廢の岐るゝ緊迫せる現段

階に到達するに至つて、一億總力をあげて戰力增强に凝集し苛烈凄絶なる危機を突破しなければならぬことは言ふ迄もない。大學、專門學校の動員化も亦更に强力に、更に適切に實現しなければならぬことゝなる。大學、專門學校に對する國家の要望の凝固結晶せるが本年六月廿五日の閣議に付議決定を見た「學徒戰時動員體制確立要綱」である。

同要綱の主目標とするところのものは結局、學問研鑽が飽迄學校の本源的なる使命であることを明示しながら、同時に學校教育をして學業、訓練、勤勞を合一統合し、計畫且持續的に、時局下の教育的要請と戰力增强を不斷に實現せしめんとするにある。特に重要特色的であるのは爾來稍々散發的、無計畫的、恣意的であつた勤勞と國防を教育體系の內に取入れ岩崎教授の謂はれる「勤勞大學」の風丰を顯現するに至つたので、爾來兎角分離し勝ちであつた學問と實生活との融合合一が、戰力增强といふ一大至上命令を通じて逞しく雄々しく成立せることゝなる。それは學徒の勤勞動員が全體としての全國民勤勞動員計畫と有機綜合的に考慮されてゐることからして明白である。從つて、このことが更に將來學科課程の一大編成換を必然的に暗示するものであるは言ふ迄もない。否寧ろ全國的なる學園網の一大改編、一部分の廢止、整備をも示唆してゐる。

かくて上述するところにより戰時下本學園が眞に完遂すべき大略四つの主要目標が存在してゐる。その一つは、言ふ迄もなく「學業の研鑽」である。如何に苛烈なる戰時下に於ても學業の研鑽は一日と雖も忽緒に付すべからざるは自明である。これがために尙現時に於てすら學徒に對して徵兵猶豫の恩典が付與されてゐる。學徒は此點深厚なる國家の意圖を十分に感銘しなければならない。其二、今次大戰の主要特徵の一つは激烈なる一大消耗戰である。これがためには直接軍需資材たると國民生活必需品たるを問はず極力生產增强に適進しなければならない。學校は最早單なる狹義學術の殿堂でなく、勤勞の野であり、工場でなければならなく、且亦從來の勤勞奉仕程度の專ら修練を主眼とせるものでもなく、現實に作業能率を高め、生產力增强に參與、協力しなければならなくなる。即ち食糧增產に、重要物資增產と輸送力强化に計畫的に而も繼續に參加しなければならないので、學校報國隊の主戰場は茲にある。其三、將來の軍務に備へ、國防能力を强化し、直接國土防衞に參加しなければならない。これがためには、イ「戰時學徒體育訓練實施要綱」に基く基本訓練種目と航空、海洋、機甲、騎道等の特技訓練種目を報國團に確立して、學徒をして眞に有事即應の態勢を具へしめねばならぬことゝなる。かくて本專門部も亦優秀卓越せる皇軍幹部の養成場たることゝなる。ロ大阪市に關しては、直接國土防衞に關しては學校報國隊を一部再編し、市各消防地域別に分屬、町會の挺身隊として、市民に率先、直接防空に當り前線先鋒勇士の忠勇武烈に恥へんとすることとなつた。空襲は常に奇襲である。地域在住の學徒が空よりの夜戰、拂曉戰に常備せんとするは現下情勢に即應するものであるは言ふ迄もない。ハ學校報國隊の他の編成は學校特設防護團の編成と活動である。學徒が其學園を敵襲より防衞せんとする熱意は當然自發すべきものであるが、是れがためには學園全體が、經營者たると教職員たるを問はず、夫々の職分に應じて眞に國難に赴かんとする誠意と勇猛心を示さねばならぬ筈である。

其四、如何に凄絶なる戰時下、と雖も學徒の文化教養が等閑視されてよい理由はない。尤も此場合戰時下の文化教養とは平時のそれに比較して如何なる質、程度のものなるやの問題が必然的に提起されるであらうが、茲では勿論是れを問題とし得ない。加之教室內の個々の講義は兎角分化的で而も無人格となり勝ちである。特に數百人の學生を對手とする場合は其感一層に痛切である。從つて此弊を幾分にても矯め、教師と學生との師弟同行としての接觸を計り、學問と實生活の交流を促進せしめんがためにはゼミナール的學術研究會の設置が是非必要となる。是れ報國團教養部の目標とするところである。

然らば當專門部は上述せる四大主目標其一を除きに如何なる現實の活動をなしたるや、其有事即應の態勢は如何。其れを一々茲で詳述する餘白は最早ない。

防空貯水池作業、工場勤務、修練行事、學徒地域消防隊の學術訓練、防護團の出動、體育訓練、學術研究會等に於て尠からぬ實蹟を收め來つたことは事實である。洵に學生は切迫せる現戰局を深刻に直視し、盡忠の至誠を竭し、皇國の危急に赴かんとする熱意を今日程熾烈に示せるときはない。それは本一部並びに二部專門部よりも多數の陸海軍飛行將校志願者を出せることによつても明白である。從つて此際此燃え上る學徒の忠誠を遺憾なく實現せしめるためには學校當局者、教職員の率先垂範が眞に學生と一丸となり教育錬成の體系に融け込まねばならない。凡ゆる舊套を一擲、學校當局者は研學と防空、勤勞、修練、體錬に眞に適應せる還境を造るに創意、誠意と實踐力を示さねばならず、教師は或意味に於て教壇より下りて學生に率先、相共に協力しなければならない。要之全學徒、全教職員は眞に戰時下に相應しい學園生活を通じて皇國興隆の一端を擔ふといふ忠誠、情熱、實踐力を示さねばならないのである。かくて上述せるが如く現下學園に於ては最早、研學が主で、報國團、報國隊の活動が從であるのでなく、兩者共に融合合一、學びつゝ現實の生活に即し、報國盡忠の至誠に生き貫く覺悟が必要である。未だに學校報國團、報國隊の存在を以て學園の餘技と理解するもの假りにありとするならば、沒常識たる以上に、國家に不忠なる徒輩と目さねばならなくなる。（一八・九・五）

神武調

戰爭と科學技術

講師　松原藤由

一

攻防に苛烈を極めつゝある今日の戰爭は實に莫大なる消耗戰であると共に迅速なる生産戰である。凄慘目を覆ふ破壞戰であると共に偉大なる建設戰である。一方に於いては消耗、破壞、他方に於いては生産、建設が即應して行はれ而も戰鬪行爲が近代科學技術の精究、進歩に依りて熾烈且つ深刻なる態樣を展開してゐるところに現代的戰爭の本質的特徴がある。

二

我が盟邦ドイツが電擊戰を敢行してから既に第五年目を迎へた歐洲戰局は消耗戰と破壞戰の典型的なるものである。殊にハリコフ周邊一帶で行はれた今夏の獨ソ東部戰線は言語に絶する血戰を演じ、恐らく國家の存亡を賭する尨大なる消耗且つ破壞戰が展開された模樣である。然し消耗しても破壞しても續々と繰り出される夥しき戰車、飛行機等科學兵器の群は、とりもなをさず兩國が近代科學技術の粹を結集し、銃後の總力を擧げて不眠不休の生産戰を戰ひ抜いてゐるからに外ならない。

即ち各個人の小さい精神内に全體を生かし、それに依つて自己の精神を飛躍せしめて、偏へに國家、民族の安泰のために敢鬪してゐる例證である。其處には闇取引や買溜に暮日なき戰時下、國民的知性の破綻者は數多く考へられないのである。要するに獨ソ戰は消耗戰、破壞戰の典型であるが、また生産戰の典型でもある。次に建設戰の典型を我々は戰ふ祖國日本の眞姿に觀るのである。支那事變が大東亞戰爭へ擴大してから日本はあらゆる犠牲を拂つて東洋からヨーロッパ的性格を放逐し、東洋の新らしき秩序と構造の建設に邁進して來た。最近アメリカが長期決戰から短期決戰に焦躁しつゝ毎り難き量の反攻を南大平洋戰線に增强して來たのは東洋に於ける日本の建設が成立の端緒についた事實に驚愕し、これ以上に建設の時を日本に與へることは近き將來に於ける我等の轉落、自滅の原因たるを神妙にも悟り始めたからに外ならない。日本は緒戰以來の大戰果と共にまた建設戰にも勝ち進んで來たのである。さてこの建設戰こそは今次の世界的戰爭に於いて最も重要なる歴史的意義を持つものであり、今次の戰爭が復讐理念、侵略主義、現狀維持主義に基く相對的戰爭ではなく絶對的戰爭である所以である。皇師征討の意義また茲にあるのだ。

今や全歐洲はもとより七洋を越へて大平洋一帶の戰鬪地域に本格的決戰が迫る秋、我等は生産戰に建設戰に國家の總力を擧げて斷乎邁進し、而して武士道的、人倫的道義を辨ぜざる狼態制心の米英を一擧に粉碎せねばならぬ。

三

現代の戰爭は一國の科學技術を基本とする生産力によつて勝敗が決定せられると言つても決して過言ではない。戰爭と科學技術は密接なる關聯を持つてゐる。アメリカ機ボーイング B 17 の重裝甲化と我が戰鬪機の機關砲口徑の擴大化の一例は、今日の戰爭が一面、科學技術の決戰であることを雄辯に立證してゐる。そしてまた戰鬪地域の廣さは好むと好まざるとを問はず兵器の消耗量を必然的に增大せしむるものである。これ識者が科學技術の一質的高さの量的擴がりへの轉化」を主張する所以である。

扨て全くの門外漢であるが私は科學技術に二つの關心事を持つてゐる。第一は日本の科學技術が明治維新このかた海外依存、即ち他立的であつたことから其の紳が全く絶たれた今日如何にして生産決戰の鍵であり、建設戰の重要な要素である科學技術を眞に日本的性格にまで高揚し其の自立性を確立して、これを銃後の生産場はもとより前線の補給基地にまで生かす對策の實踐といふことである。第二は物的生産の緊急不可缺の餘り、科學技術と言へば直ちにこれを狹義に解して自然科學、自然科學的技術を指稱し、ともすれば社會科學、社會科學的技術を輕視する風潮に對する小さな反抗である。もとより生産力の擴充が至上命令である今日自然科學、自然科學的技術の發達を促進せしめることが焦眉の急たるは誠に當然である、とは言へ社會科學や社會科學的技術を輕視することは誤れるも甚だしいと言はねばならない。昨今生産の隘路といふ歎げかはしき言葉を耳にするが、もとよりこれは、單に道具、機械、裝置、施設のごとき物的勞働手段の擴充に依つてのみ解決される問題ではない。むしろそれに照應するところの勞働力並にそれに關聯して生起する社會問題の解決に懸つてゐるのである。前者は物質的なものであり後者は人間的なものである。生産隘路の原因は案外、人間的なものの中に内在してゐるのである。こゝに私は戰時下に於ける生産隘路の突破、社會問題の解決、ひいては國家の絶對的要請である戰力增强のために益々社會科學、社會科學的技術の高揚が必要である所以を痛感するのである。これを要するに戰ひが進めば進むほど一機も一彈も實量共に敵に敗けてはならない今日、自然科學、自然科學的技術は言ふに及ばず社會科學、社會科學的技術も國家的自覺の下に對等の存立性をもつて高揚せらるべきではなからうか。

學内報

卒業式豫告

昭和十八年度卒業並に修了式は左記の通り執行される。

學部第二十回　九月廿一日午前十時　於　威德館

專門部第一部第十二回　九月廿二日　午前十時
同　第二部第五十六回

於　專門部講堂

第一豫科第二十回　九月廿日午前十時
第二豫科　第十回　於　豫科講堂

臨時協議員會開催

去る九月九日午後四時より新大阪ホテルに於て臨時協議員懇談會を開催、理工科系學科設置問題に關する調査委員會の報告に基づき種々懇談を遂げたる結果、理事者に於て報告を勘案して設置方針の下に研究調査を進めることゝなつた。

國漢科學力檢定

專門部國漢科に對する文部省の國語學力檢定は、去る九月十二日午後六時より九時迄第三學年生徒に對し實施された。

日本文化講義

昭和十八年度日本文化講義は京大教授澤潟久孝博士の「萬葉精神について」と題して、學部は七月五日午後一時より豫科講堂に於て、專門部第一部は七月十九日午後二時より、專門部第二部は同日午後六時半より天六學舍講堂において開催した。

增山監事逝去

本學監事協議員增山忠次氏は宿痾の爲京都市岡崎平安神宮前の別邸慶流莊において療養中の處、七月廿八日遂に逝去された。享年六十三。

氏は明治卅七年京大法科卒業、判事、大阪株式取引所理事、土佐セメント代表取締役副社長、馬政調査會臨時委員、日本競馬會理事等歷任せられ、大正二年以來本學講師として「市場論及取引所論」を擔當して二十年、其の間本學協議員、理事又は監事として大學經營の衝に當られ、本學の爲に盡力さるゝ處多大なるものあり、圓滿なる人格は學の内外より追慕されてゐる。

海軍豫備學生壯行會

空の航空決戰は日毎に激甚の度を加へてゐるが、學窓より空の決戰場を志願した本學學生中、美事第一次考査に合格して入隊を許可された海軍豫備學生は〇〇〇名の多數に上つた。これ等烈々たる鬪志を抱く學鶩の壯行會を豫科は十一日午前十時半豫科講堂に於て專門部は十日午後一時天六學舍講堂に於て夫れ〳〵盛大に擧行し、學長、豫科長、專門部長、代表學生の激勵に應へ、學鶩は正義に燃ゆる學徒魂を發揮して米英擊滅に勇躍進發するの意氣を示した。

校友欄

秀麗會

第八六回例會　六月十九日午後六時より寺内通り海務協會食堂に開催した。當日は内地出張より歸連された牛井さんを中心に、校友會役員會に列席した感想並に母校の現狀について詳しい報告あり、この具體的な報告に基づいて母校の發展興隆策につき眞摯熱烈な討議に終始した。

廣田　山下君歡送迎會　本部評議員廣田憲信君が突然社用旁々視察に來滿された歡迎會と、會員山下三郎君が大阪商船奉天出張所長榮轉の歡送會を七月六日午後六時半より海務協會食堂に開催した。廣田君よりは母校問題が中心として進められ、校友會本部の活動について說明あり、一同は國家目的に副ふ明朗學園建設に尙一層本部は積極的に活動されんことを望んだのである。支部としては本部支部の緊密なる連絡、母校教授及本部の大陸視察派遣、校友會名統一、校友總會の開催を一地方に限定せず數年に一度は大陸に於て開催すること、教職員待遇問題等屢々提言したる處の諸問題を遠かに解決されんことを望むや切。

第八七回例會　六月廿日午後六時より海務協會食堂に開催　滯滿中の廣田さんを圍み、前回に引續き母校の發展改革問題について熱心な話題が繰り擴げられた。待遇問題、奬學資金制度、其の他揮唱してゐる改革問題は多いが、當局者の

校友總會御通知

先般はがきを以て全校友諸君に御通知を差上げましたが、昭和十八年度校友總會は左記の通り開催します。議案は理工科系學科設置等の重要問題があります。重大時局下母校關西大學が國家要請に從つて企圖される事業を協賛し、意義ある校友總會として、多數の御出席を期待致します。

昭和十八年九月　關西大學校友會

記

一、日時　昭和十八年九月廿二日（水）午後六時半
一、場所　大阪市大淀區長柄中通　關西大學天六學舍講堂

尙當日警戒警報發令中午後三時迄に解除なき場合は上記次第により九月廿四日（祭日）とし、同日尙解除なきときは九月廿六日（日）、十月三日（日）に順延しますから然樣御高承下さい。

熱意不足は實現の隘路となつてゐるのを奈何せん。我々が大陸の一角に於て如何に母校に對する熱情を披瀝して叫んでも地元の校友會に於て熱意に缺くる處があつては徒に空疎の言となり終ることとなる。地元校友諸氏の一層の奮起と熱烈なる活動を開始されんことを切望する。

朝鮮支部

八月一日午前八時第卅一回朝鮮神宮參拜を擧行、終つて一同南山亭で休憩、それより既定の通り今春以來延び〳〵になつてゐた役員改選の件を附議した結果支部長には滿場一致岡本現支部長を推擧御留任を願ふ事に決定、其他の役員は支部長並に幹事長に一任することに決議して九時過散會した。

本年度役員は次の通りである。

支部長　岡本至德、副支部長　松田　清
幹事長　野田博　幹事高橋伊平、三上吉隆、山下喜代志、秋山雪太、稻垣鐵五郎
尾原東成、大山正雄、伊藤國雄、田中豐次、伊東祐一、海野美代市、曾根三郎、飯田守、川島通利、近藤藁
常任幹事　伊東祐一、曾根三郎、近藤藁

尼崎支部

七月十七日土午後五時より尼崎市丸高會館において第四回夏季總會を開く。出席者三十名、國民儀禮の後松尾支部長の挨拶、天野常任幹事の會務報告につゞいて來賓母校森川、加藤兩教授より有益なる時局談あり、話は母校の現狀に及び支部長の提案により重大時局下左の決議を母校當局に提出することに可決した。

關西大學校友會尼崎支部ハ現下ノ要請ニ即應シテ母校關西大學ニ理工科系學科ヲ速カニ設置セラレンコトヲ要望ス

右決議ス

上海支部

租界返還の欣に翻翻と飜る青天白日旗の下八月四日午後六時半より日本倶樂部二階に於て月例會を開催した。話は物價及び租界返還後の諸問題に終始し、當面の現實問題につき熱心に意見を交換した。尚九月四日の例會には「中支に於ける煙草生産及配給狀態について」煙草統制懇談會書記長富田氏のお話を伺ふ。

出席者：忽那、福富、藤木、富田、竹田、吉田、村田、岡島、寺嶋、太田、大野、吉村、手島、槇塚、高岡、玉井、辻野、大森以上の諸氏

○會員消息

專二商

齋藤　秀雄（10）（西部第三二部隊森隊、（財團法人科學動員協會）
貞光　利一（17）東京市豐島區椎名町一ノ四〇四一、金井正文方
白井　茂（9）（大阪府食糧營團販賣課）
田中　仁（14）神戸市灘區福住通五ノ三
田邊　啓文（15）阿倍野區萬代西一ノ一
四、大阪貯蓄銀行鶴見橋支店
高谷　貞雄（12）兵庫縣武庫郡魚崎町魚崎七三二ノ一〇六
西　長市郎（二）城東區中本町五五〇、（關西配電會社教育課）
野田　博（二）（國民總力中林聯盟理事長）
堀　英夫（17）（南ボルネオバンザルマシン市、野村東印度殖産貿易會社
政谷　武雄（8）滿洲國錦州市協和區成和街二ノ二九二（錦城工業所）
松本　勸（13）港區二條通一ノ一〇
松本　孝（卅）布施市小若江三八七、（櫻商會取締役）
松本　眞從（16後）兵庫縣川邊郡園田村森南口三一八
村上　勝治（卅）元山府綠町三〇ノ四
柳澤　明（17）（奉天省瀋陽縣蘇智村七家屯、滿洲藤澤友吉商店化學工場
山田國三郎（2）（奉天市敷島區協和街五段一號、三興會社奉天支店重化工課長）
山地善弘（9）（大阪府食糧營團企畫課
弓削多義郎（13）（天津興亞第一區常盤街一ノ三一、興勝洋行）
餘根田廣太郎（12）（神戸高等商業學校講師）

專文

內山勝三郎（2文）豐中市岡町惠美須通二（大阪新聞社經濟部）
岡田　清敏（16後英）（廣島市東千田町廣島文理科大學哲學研究室）
清田　一夫（16後英）（廣島市大手町一ノ二四、板垣衞周方（廣島文理科大學在學）
高津壯太郎（7國）張家口、蒙古自治政府內政部文教科
高瀨　浩（16後國）愛媛縣宇摩郡川之江町一七〇一（縣立三島中學校教諭）
富塚　豐（16前國）藤澤市諏訪町六三〇七（陸軍々屬）
藤井　專藏（3文）福知山市岡之下九（大阪鐵道局福知山車電區）
八木武三郎（12英）首里市大中町二二（沖繩師範教授）

改姓名

昭13專一商　猪熊守　→　熊本守
昭10大法　太田寬治　→　池田寬治
昭14專二商　岡田春義　→　成行春義
昭13大法　島津勝　→　島津雅靖

訃報

砂田　義秋（昭15專二商）本年二月二十五日ガダルカナル島に激闘中散華、遺族新居濱市西原砂田（兄）砂田長一殿
中路　久直（昭10大經）中支並に南方戰線に奮戰中去る三月廿二日戰病死さる遺族は京都市左京區西條柳之圓町二六後）中路京子殿
安川勝太郎（明34法）永く校友會役員として本會の爲に盡力される所多大であつたが八月二日逝去された。
山本　敏輔（昭9大經）陸軍大尉、十三年五月出征、去る二月三日南方アル諸島に於て名譽の戰死をさる。遺族防府市鑄物師（父）山本芳輔殿
島田藤次郎　學部法二在）陸軍上等兵、本年三月一日南方戰線に於て戰死、遺族大淀區長柄中通二後島田フミエ殿

校友會費拂込者氏名（二）

◇一時拂　金五拾圓

足立　長雄　井田　安二　大澤　明策　加藤　昌秀
忽那文治郎　仲島　忠次　山本　貞範　岡田　清作
渡邊　判一　山口　隆清　佐藤　辰夫　田中　藤作
吉田　音松　正岡　榮治　渦岡　力雄　小林　正美
高尾晋太郎　竹谷　太郎　中田克己知　西田　竹雄
樋口恒三郎　前田　常好　松本　芳雄　森脇　秀正
山本　博亮　荻野　充雄　渡邊　四郎　御堂河内四市
江里口正行　横山　熊夫　丸山喜三造　渡邊　判一
阪倉　久治

◇昭和十八、九、廿、廿一、二年度分　（金拾五圓）

福本　眞一　安川　彦夫　深川　重義　松木　清三
橋本　直彦　北川　太一　片岡　一男　星野　純一
村田　英一

◇昭和十八、九、廿、廿一度年分　金拾貳圓

坂室　信一　盛見　利夫　矢野　國臣　山口九二之
小川　立朝　太田　義三　奥田　秀行　加藤　道宣
片岡　康幸　木村　敏定　眞田　俊雄　志方　正八
田中　又三　巽　啓三　中村　敬直　新野廉太郎
野田　博　松浦　武　三橋　國松　山内　一雄
山崎　治　山中　木太　吉岡　榮八　合田　實夫
松井　道夫　西川　寛　今井　末廣　川邊　嚴春
西濱　信夫　玉井　磨輔　佐藤善之助　高瀬　友治
花崎　迪　松田　清　水木幸次郎　横内　弘文
阿部　禮治　山下　松吉　前田　逸治　中原　八郎
田村芳太郎　高島　清　白川千代治　島　三雄
小林　俊雄　黑田　永次　加邊　力　川島　弘行
芦　傳一　秋田　修一　池田富次郎　大先　一成
大島　武夫　大西　幸夫　岡嶋　省三　加藤　清
勝原　睦夫　木戸　榛　北川　實男　黑鞍　勇
佐藤　末男　堺　讓介　志野覺治郎　柴田　士
下岡英次郎　須佐美八藏　諏訪富三郎　隅　義一
田中　義一　田野　數衛　高田　康雄　高野　良夫
高濱　信男　竹内　宇苗　竹西　宗助
高橋比左也　富田金三郎　中井　彌六　戸根　泰雄
中山　幸市　橋本　好三　畑　義博　林　常太郎

◇昭和十八、九年度分　（金六圓）

半羽　鈴喜　東田　高明　平野　政夫　廣實　郁雄
福井　一榮　福井　由吉　福岡　彰郎　藤井　幸則
藤木　德深　藤田　實雄　藤原　寛一　堀内　旭
本宮　久吉　森　明光　松本　宜寛　山下喜代志
井上　善雄　伊東　祐一　乾　義雄　岩武　眞一
大木　幾馬　大迫　秀男　大村　喜覺　川上新太郎
木下　哲彌　北岡乙四郎　桐谷　良一　小角太一郎
小曳　陽市　佐々木音滿　佐藤　繁　蝶戒根　令
清水　信良　辻　忠　鶴田　榮　中川八百八
長岡　實　初瀬川利雄　樋口　悅造　福本　一
前田　隆弘　松谷　連哉　松本正太郎　松本　昌平
三笠　稔　山中　信夫　吉岡　潔　吉川　重殷
北坂正三郎　佐中　一太　西本　信三　谷本　忠雄
牧村　貞彦　井家　莊吉　和氣　正之　鈴川　潔
坂井嘉壽雄　本田　由雄　赤澤　清　井上　欣助
森　林三　村上　泰三　辻　正夫　車田　輝平
菊池　勳　小椋義三郎　岡　常治　荒木　達雄
井上　登圓　笠原　重義　片山　昇　木戸　康之
黑田　一男　紺家　稔　柴田　治　菅原　一夫
杉野　勳弘　杉本　敬彰　鈴木　正義　田中　愼二
田中　正章　田村　格治　高島　齊安　瀧井　義男
武内要次郎　民田　五郎　中西貞次郎　中村　簡吉
長澤　宏　鳴神　烈　野々村　弘　藥井　卓平
古川　憲夫　松橋　賢司　宮井與四郎　宮田　八東

◇昭和十八年度分　金參圓

安藤　光　野村　次夫　村上　寫眞　中谷　敬壽
武内　省三　堀　正人　木村　健助　賀來　俊一
加藤金次郎　河村　宜介　吉田　一枝　瀧澤喜子雄
正井　敬次　水谷　揆一　三木　純吉　八島　治一
岡本勝次郎　大小島眞二　河村　信一　山田松太郎
三枝樹正道　廣瀨　捨三　西井　克己　上道　直夫
和田　驥二　川上　敬逸　片岡甚太郎　寅本　英僑
三谷　友吉　中村良之助　中川庸太郎　矢口孝次郎
黑正　嚴　高橋　盛孝　安川安太郎　山田　正三
中田　淳一　福島　四郎　柳瀨　兼助　黑田　覺
谷口　吉彦　國藏　亂臣　三谷　道麿　小野木　常
佐伯　三郎　種田　重正　菅　守常　池田　榮
細江　逸記　山木戸克己　山本　順應　石田文次郎
堀　經夫　高木　秀玄　新町　德之　入江眞太郎
蜷川　甫三　信原　照夫　藤澤章次郎　奥宮　精一
若松　新吾　土橋　成多　岡橋　保太　桂　忠雄
菊池金次郎　下島　光　賀來　利一　西山　謙二
日比野忠雄　能世　元由　古川　多　吉川　秀義
市田彌一郎　中村　寅吉　山口　辰雄　吉田　健六
小島　正顯　草壁　武藏　岡師　親德　政瀧　法城
端山　義正　津田　良雄　福島　正二　南　勉
田邊信太郎　西村勝太郎　袋井榮太郎　久保田作平
金井　良三　中川市次郎　赤石　信二　岡　泰
新井　宗逸　石原　孫市　伊藤　保　池　吉彦
筏井　芳助　畠畔　保　石橋　輝雄　上阪卯之助

松崎　義盛　廣澤政太郎　池田信之助
垂水誠二郎　山田　千吉　伊關　國雄　神吉　等
羽田　正一　山本　磯治　堀　俊雄
橋本　源吾　石川　進　渡邊　格司
伊藤　碩州　上野　照夫　田中　明親
川村勝太郎　安田　信一　木村　武夫
神戸　三郎　後藤進之助　高畠　寛我
今川　太郎　吉田庄太郎　鈴木富太郎
下程　勇吉　宮崎　幸三　平林　治德
杉平　顯智　須藤　文吉　森　政造
三木　治　木村　禎橋　菊田　太郎
有馬健之助　江馬　務　小山　慶作　坂本　憲三
安田　恭平　山脇　毅　魚澄惣五郎　藤本　進治
土橋　文雄　武田藏之助　吉川　貫二　内藤耕次郎
大平　賴母　岡本　午一　小川　忠藏　金子又兵衛
所　勇　西田　禎文　石濱純太郎　奥平　定世
田畑茂三郎　岡田　辰三　古林　喜樂　一海　景菊
靜田　均　近藤　文二　四宮　恭二　木村和三郎
古屋　美貞　陶山誠太郎　末川　博　德永　清行
寅本　英僑　佐伯　千仞　末廣　重雄　佐々木愈一
黑正　嚴　名井　民雄　牧　健二　矢野　仁一
山田　正三　黑田　覺　長濱　政壽　齊藤常三郎
中田　淳一　中島　玉吉　恒藤　恭　村本　福松
谷口　吉彦　吉澤　義則　竹田　省　大隅健一郎
小野木　常　細江　逸記　堀　經夫　蜷川　甫三
池田　榮　石田文次郎　入江眞太郎　神宅賀森惠
新町　德之　藤澤章次郎　奥宮　精一　田中　健三
小泉　幸二　菊池金次郎　土橋　成多　道端常治郎
笈西大次郎　下島　光　坂倉　廣顯　角田　文雄
寶田　利一　西山　謙二　安達　金城　日比野忠雄
塚本　春雄　能世　元由　古川　多　吉川　秀義
朝日　勘一　小松　市郎　中村　寅吉　市田彌一郎
小林　壽　岡持敬次郎　四辻　詮　山口　辰雄
神保　敏男　濱美元次郎　小島　正顯　吉田　健六
狹間　一夫　草壁　武藏　岡師　親德　政瀧　法城
端山　義正　津田　良雄　福島　正二　南　勉
田邊信太郎　西村勝太郎　袋井榮太郎　久保田作平
金井　良三　中川市次郎　赤石　信二　岡　泰
新井　宗逸　石原　孫市　伊藤　保　池　吉彦
筏井　芳助　畠畔　保　石橋　輝雄　上阪卯之助

上田利夫　小井保　小倉眞一　大岩新九郎
大出一俊　押谷忠之　岡田實之　沖田實
大塚重延　大西忠三　岡島孝好　川淵弘保
亀山光司　勝村磐　加羅田文英　笠島由孝
桐本晴光　岸田榮三郎　木曾增夫　栗須一
黑田隆一　熊本眞春　近藤直芳　小山國雄
小林仙一　小島正作　後藤德太郎　池田利彦
笹山幸一　坂本龍夫　澤田之宏　後藤武夫　石黑達郎
白川忠勝　白野信二　島谷榮　島田武夫　石田嘉三
谷山清喜　高見壽之　塚本利三郎　泉隆三　石田瑛一
塚本獨治郎　高橋進　今村良一　今井清　今井輝夫
田中誠逸　武藏久男　宇喜多景家　岩尾良　今關良藏
竹内正治　立野忠吾　宇部吉隆一　岩岸榮　岩崎義雄
手島忠博　士肥兵市　臼井敬叟　内田堅　植西獨雄
中内秀治　戸台己之助　内田吉衛　海村勉　植村英一
中島政德　中島久綱　惠澤泰治　邊藤吉次　打田要三郎
中井嘉市　中務平吉　小野田正孝　越智昌治　小川重治
中島隆次　永見房吉　永田信明　岩崎正弘　武田俊三
長崎政道　難波春雄　織田九郎　大江權五　大河原尚　武田木曜
根木孝　西尾喜太郎　太田慎三　大越務　大津九一郎　忠平長治郎
馬場五男　萩原重太郎　大峰巍　大月義平二　岡田三郎　巽鐵太郎
法覺　藤原隆雄　逢阪勝見　岡部庄次　堂本源吉　津川鑑一
秦野謙三　藤本四郎　岡田昇　岡田信一　富田茂　津戸吉郎
藤井勝　岡田康　岡部力　豐島寅雄　塚本康雄　都野守良雄
藤田百太郎　藤井稔　増田通　岡本忠雄　沖原　中井安雄　蔦谷　堤　新吉　佃義三
牧野宏　松岡爲吉　奥田籌夫　奥野靜次　奥野正己　奥山伍郎　中島靖夫　近松正雄　近木富藏
増田財　松阪太郎　池田忠雄　石川滋夫　齋藤直之　岸岡博雄　中西靜麿　利根川良彦　千原敬治
松田後一　三浦忠義　伊地知兼郎　岡本毛德　角野秋二　中山秀次　中野達生　德田高二　戸部智夫
松本清　六村卯三郎　加藤修　加納芳雄　中塚竹藏　長澤健一　中村行己　土井善一
村山早苗　山岸通夫　大原薦　片岡國夫　長柄金吾　永井子之助　長田清二　德光晴作
森光一夫　山本宏　片山元藏　金子堅太郎　成瀨國十四　長久茂信　長濱行治　德毛俊雄
森山內喜八良　山口多賀藏　門谷壽郎　金田雅一　西辻藤一　西村末治　仁熊士郎　名越民次郎
吉田達　吉川幸雄　川嶋實　川崎平　西田善一　野田茂樹　野田文雄　根木義務　內藤滋治
吉本實　若林勇　河村雅吉　河崎隆嘉　野田正明　野崎勇二郎　中野勝見
武元邦男　辛島甫　瓦谷齊三　河田一　野村順三　萩原敏隆　橋本一男　中村行己
筒井國義　谷住德一　瓦本眞市　木村一郎　橋本民三郎　橋本三郎　竹內靖
寺本利雄　谷山寅雄　木村太郎　木下大次郎　長谷川敏亮　波田榮弘　東野清太郎　八田潔
德久俊次　戸倉秀臣　木村正　北住三之助　原田市之進　早川閏二　平井正義　堀岡泰次郎
德山在浩　飛田政繁　木下宏　北野寬　本庄逸郎　本郷一臣　福島勇　福田德男
中島義信　中村光太郎　北村榮五郎　京村行主　深井敏雄　福井啓一　藤井淳二　藤岡英輔
中野文吉　二谷宇市　清原俊之助　金湯一福　福谷長治　福桝彌太郎　藤田茂　藤本敏男
西川敏春　八田幾藏　北浦圭太郎　熊田卯三男　藤澤靖彥　藤田茂樹　藤田一茂　藤吉榮
野村吉治　林隆之　金守雲　黑川篤　藤吉榮　古田吉五郎　馬淵精　直下正英
馬場盛一　濱崎多松　久保金一　倉田陽吉　牧信清　松井孝治　松岡行雄
原一潔　濱島久義　熊野猛　桶崎憂　小島龍太郎　松島武三郎　松井善太郎　松田義德　松原藤由
平田勉　平澤農一　栗山基一　小池照太郎　小田文雄　松島靜　松本靜史　松本包文　松本正雄
福田三郎　福田敏夫　小泊六翁　小林功　小林勝美　松本信次　松本英一　松村勘次　松村欽治　松村作二
原田作造　平井善一　小林康寬　小林信行　小林和一　松本敬　松元孝義　三浦孝昭　三島俊彥　三宅良孝
藤井直治　藤井武　兒島本次　小間井興一　小林好　佐々木豐一　佐藤芳太郎　三浦茂男　三宅正己
藤岡了暢　藤本順二郎　兒玉善吉　後藤田源之助　佐藤義博　佐藤嘉一郎　佐伯憲三　三原景　宮本要
細井新四郎　細井弘三　駒井信一　後藤幸雄　佐藤齋　佐藤義　笹山芳一　酒井行直　宮崎秀夫　宮前邦雄
細木美代林　武石貞雄　近藤直芳　佐々木敬　佐野繁次郎　酒井宗一　澤田勇夫　溝邊文和
眞鍋甲　松本眞太郎　佐藤田源之助　佐藤義博　酒井政之　杉本巖　杉本信夫　以下次號
松浦雅之助　松谷哲藏　佐藤嘉一郎　佐伯憲三　杉本準三
松本政夫　三宅一之　三宅富三郎　佐藤芳太郎　笹山芳一　杉本英和　杉山保平
三村福一　村尾靜明　村尾靜明　佐藤義博　酒井行直　下猶紹隆　鈴木武夫
水谷清示　富永正晴　桃井忠雄　佐藤義　澤田勇夫　柴田忠男　清水榮松　鈴木良男
南雄　村田秀雄　森谷克己　佐藤義博　杉本信夫　清水陽太郎　執印正俊　柴田武一
村田定市　森下勝之輔　森英之助　坂本佐太郎　塩谷進　白川義雄　塩谷三郎
村田權太郎　森芳松　安田作太郎　松本信次　勢渡逞男　白柳利一
森英之助　山下博　山川正七　松村勘次　關谷宣　仙波種春
吉木由雄　山下正夫　吉崎延一　松村欽治　田中茂　仙崎憲治
和田茂男　和田義爲　松村作二　田中茂藏　田中深治
松村孝　田口金二　田尻芳信　田村淺一
田中義雄　田村義久　田邊由治郎　多久和良三郎
田仲嘉久　多田米藏　高木龜太郎　高馬將男
多氣田治　瀧澤敏三　瀧見毅
武田俊三　武田木曜　武久泰正　竹谷和夫
忠平長治郎　巽鐵太郎　谷淵和郎　玉中敬一
津川鑑一　津戸吉郎　都野守良雄　塚本敬
塚本康雄　堤新吉　佃義三　辻寬治
蔦谷藏　蔦田博史　蔦谷藏　近木富藏　千原敬治
近松正雄　利根川良彥　戸部智夫　土井善一
堂本源吉　富田茂　德田高二　德光晴作　德毛俊雄
豐島寅雄　中井安雄　中島靖夫　中西靜麿　中野勝見　中村行己
中野達生　中塚竹藏　中村靜　永井子之助　永田正勝　長尾辨三
中山秀次　長澤健一　長柄金吾　長田清二　長濱行治
長久茂信　成瀨國十四　難波武夫　仁熊士郎　根木義務
西田善一　西辻藤一　西村末治
野田茂樹　野田文雄　野田正明　野崎勇二郎
野村順三　萩原敏隆　橋本一男　橋本三郎
橋本民三郎　長谷川敏亮　波田榮弘　八田潔
原田市之進　早川閏二　東野清太郎　平井正義　堀岡泰次郎
本庄逸郎　本郷一臣　福島勇　福田德男
深井敏雄　福井啓一　藤井淳二　藤岡英輔
福谷長治　福桝彌太郎　藤田茂　藤本敏男
藤澤靖彥　藤田茂樹　藤田一茂　藤吉榮　古田吉五郎　馬淵精　直下正英
牧信清　松井孝治　松井善太郎　松岡行雄
松島武三郎　松田義德　松原藤由
松本靜史　松本包文　松本正雄
松本信次　松村勘次　松村欽治　松村作二
松元孝義　三浦孝昭　三島俊彥　三宅良孝
三原景　三原茂男　三宅正己　宮本要
宮崎秀夫　宮前邦雄　溝邊文和